

朝日新聞

「ワークライフバランス」は変な言葉？ 単純化される、働く人の現実

有料記事

聞き手・田中聡子 2025年10月21日 6時30分



労働政策研究所長の濱口桂一郎さん 

「ワーク・ライフ・バランスという言葉捨てます」。自民党総裁選での高市早苗氏の発言に対し、様々な意見が出ました。中には「ワーク・ライフ・バランス」を重視する社会へのいらだちが垣間見える声も。労働政策研究・研修機構労働政策研究所長の濱口桂一郎さんに、日本の「ワーク・ライフ・バランス」の現在地について聞きました。

——高市氏の発言をきっかけに「ワーク・ライフ・バランス」に注目が集まりました。

「ワーク・ライフ・バランス」って、実は変な言葉ですよ。この言葉は「ワーク」と「ライフ」が対立を起こしているというイメージを与えます。

でもフェミニズムの中で家事や育児が「アンペイドワーク（無償労働）」と言われてきたように、「ライフ」は「ワーク」でもあるわけです。同時に、「ワーク」とされるものは「職業生活」という「ライフ」でもある。どちらも「ワーク」であり、「ライフ」でもあるのです。

——明確に境界線があるわけではないですね。

一般的に、ワークは「マスト（やらねばならない）」の世界、ライフは「ウィル（やりたい）」の世界であると考えられています。でも実際は、家事・育児を誰かが「やらなければならない」ように、仕事も面白さややりがいなど「やりたい」からやるということもあります。働く人はそれぞれの状況下で、「マスト」と「ウィル」のバランスをどう取るか考えています。

「マミートラック」という揶揄

「ワーク・ライフ・バランス」という言葉は、複雑な現実を単純化してしまいました。そして「ワーク=マスト」「ライフ=ウィル」と考えるから、ライフのためにマストを制限すると「やるべきことをおろそかにしてライフを満喫している」と見られてしまうのです。

——制度が充実する一方で、やはり仕事を制限すればペナルティーがあります。

ワークの世界は、ライフの領域の責任が希薄な人たちを前提にできていますからね。だから育児で仕事を制限する働き方に対し、「マミートラック」という揶揄（やゆ）するような言葉も生まれるわけです。でも私は、「マミートラック」とされる働き方の価値が見直されてもいいと考えています。

——どういふことですか。

日本企業は、管理職もヒラ社員も、全員が「頑張って働く」ことが当たり前とされていますが、世界的に見れば異例です。諸外国では、少数のエリートは仕事に邁進（まいしん）して厳しい要求に応える、大多数のノンエリートは与えられた水準の仕事をクリアするだけというのが一般的です。

新幹線に乗るときに、「グリーン車が当たり前」なのが日本企業です。それ以外はデッキで立たなければいけない非正規雇用。でも本当は、多くの人は一応座れる自由席でいいはずなんですよね。この自由席が、今「マミートラック」とされる働き方です。現状はグリーン車が「ノーマルトラック」になってしまっているのです。

——なぜそうなったのでしょうか。

戦後の日本が平等主義になったからです。エリートとノンエリートの格差がなくなり、全ての社員がエリートのように猛烈に働く文化を作ってきました。一概に悪いとは言えません。同じ会社の正社員である限り差別がなく、平等に扱われる。私は「ガンバリズムの平等主義」と呼んでいます。

でもこの平等主義は「がんばれる人の平等」です。がんばれるかどうかは個人で完結するものでなく、夜中まで働いている時に子どもの面倒を見ている「銃後の守り」があるからがんばれるわけです。この前提を無視して、そこに女性を投げ込んで、さあ活躍しなさいと競争させられたらしんどいですよね。

「女性活躍」は応援しても...

——「女性活躍」も多くの企業が掲げています。

「ワーク・ライフ・バランス」に反発する人でも、「女性活躍」には乗れるんです。「ガンバリズムの平等主義」の中で働いてきた人たちにとって、「がんばっている女性を引き上げよう」という考えは、自分たちの論理の延長線上にあるからです。ところが「家庭でのマストがあるからそこまでがんばれない」ということは、まだ十分理解されているとは言えないでしょう。

——人事考課が「ガンバリズムの平等主義」を補強しているような気がします。

1990年ごろから「欧米はもっと厳しくやっている」という大きな誤解とセットで「目標管理」が入り込み、ヒラ社員にも「目標に向かってがんばれ」という評価制度が広がりました。現実には逆で、諸外国ではヒラ社員の評価なんてないのが当たり前です。

——がんばってくれたら、企業には都合がいいですね。

結果論としては、そうです。でも実際は「都合がいいから」より、「それが正しい」と思い、その文化の中で成り上がってきた人たちが経営者だから当然なのです。だから企業サイドから見た時、現状を変えるロジックってあまりないんですよ。「正しい」ことであり、がみがみ言わなくてもヒラ社員が意欲的に働いてくれる。ヒラ社員にも同じ意識があり、ストライキも起きにくいですしね。

——あまり希望が見いだせないですね。

社会全体で見ると、今は移行期なのだと思います。男女ともに「転勤がある仕事は絶対にいやだ」というような考え方が広がっている若い世代と、中高年層との感覚の違いが表面化しています。世代交代によって変化は生まれるでしょう。

もう一つ必要なのは、「ガンバリズム」的な働き方に「ついていけない」「嫌だ」という人たちを振り落とさない形で、「がんばる人」をどう選ぶか考えることです。しかし、「社会は平等になった」と感じている人たちにとっては不愉快な話でもあり、納得できるかどうか。難しいかもしれませんね。

高市氏の「WLB捨てる」発言、過労死弁護団が撤回求めて抗議の声明 →

濱口桂一郎さん

はまぐち・けいいちろう 1983年旧労働省入省。政策研究大学院大学教授などを経て、2017年から現職。「賃金とは何か」「ジョブ型雇用社会とは何か」など著書多数。

高市早苗総裁 →

高市早苗氏が自民党の新総裁に就任しました。その後、公明党が連立政権から離脱し、26年間続いた自公関係は解消されました。首相指名選挙はどうなるのか。関連ニュースをまとめてお伝えします。[もっと見る]

朝日新聞のデジタル版に掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.